

行動主義の何が問題なのか

渡邊芳之
(帯広畜産大学)

こんにちは。帯広畜産大学の渡邊と申します。私は専門は性格心理学なんですけども、方法が気になって、昔から方法の問題についても書き物をしています。今日これからお話しすることは、「行動主義の何が問題なのか」と言うことです。

今回、この研究会の依頼を荒川さんからうけたときに、何が問題になっているのか全然わかりませんでした。荒川さんの頭の中で問題になっている行動主義っていったいなんなんだろうかということを考えるうちに、おそらく今日ご参加の皆さんも行動主義で何が議論されるのかわからないんじゃないかと思いました。そこで、ご存じの方には当たり前の話ですが、行動主義を批判するときに、どこにポイントを宛てて批判が成り立ちうるのか、という問題と、それでどんな議論が成り立ちうるのかと言う話をしようと思います。

1. 行動主義批判？ どの行動主義？

この研究会の趣旨が、ある種の行動主義に対する批判であることはわかりやすいです。しかし、私のように行動主義的な心理学に親しみを感じている人間が真っ先に考えるのは、批判が向けられているのはどの行動主義なのかということです。先ほども出てきましたけれどもワトソンが 1913 年に、行動主義宣言と今は呼ばれる論文を書きました。このワトソンの行動主義宣言が心理学の入門書とか教科書にどう書かれているかというのと、多くは「心理学の対象を行動に限定した」と書いてある。でも、このとき、心理学の対象というけれど、心理学のうちの何の対象なのかが大事なのだと思います。その後の行動主義と、行動主義の影響を受けた心理学の歴史を見ると、心理学の対象を行動に限定したというのが、大きく 2 つの流れになっていることがわかります。

2. 徹底的行動主義と方法論的行動主義

一つは、心理学が研究したり、分析したりする対象、心理学が何を研究するのかを行動に限定した心理学があります。いわば行動を研究するのが心理学だと考えた行動主義があつて、それは流れ流れて、徹底的行動主義と呼ばれる心理学の一派になっています。これについてはあとで、もう少し詳しくお話します。

もうひとつ、もっと広く心理学に共有されている行動主義としては、心理学の研究対象を何にするかという問題とはやや別に、心理学がデータとして集めるものを行動に限定しようという立場があつて、それが方法論的行動主義と呼ばれることがあります。(この方法論的行動主義という呼び方は、徹底的行動主義の人たちが、徹底的行動主義以外の人をやや侮蔑的によぶときに使う言葉ではあるのですが、上手い言葉なので、使わせてもらっています。)そこで、そのデータ収集の対象を行動に限定したという意味での行動主義のことを、ここでは方法論的行動主義と呼んでおきたいと思ひます。結局、行動主義というのは、その後 100 年の歴史の中で、徹底的行動主義という流れと、方法論的行動主義という流れの 2 つに大きく分かれたと言えます。

この 2 つについて、もう少し詳しく見ていきたいと思ひます。徹底的行動主義と方法論的行動主義というのがどこが違うのかということなんですが、先ほども言ったように、ワトソンより後の行動主義は、だいたいその後 40 年くらいで明確に分れていったのですが、スキナーに代表され、スキナーだけでもいい徹底的行動主義と、ハルやトールマンに始まって、その後心理学に浸透していく、方法論的行動主義に分れます。スキナーの独自の点は、スキナーは、心理学の研究や分析の対象を行動に限定するということを強く宣言しているわけです。スキナーは、それまで心理学が研究の対象にしていた概念、意識だとか心だとかを、そのまま扱うことを非常に強く批判しました。ただ、スキナーの徹底的行動主義は、心や意識を研究しないんだとよく誤解されるんですが、これは全然違います。スキナーの徹底的行動主義では、心や意識も行動だ、という捉え方です。具体的には、スキナーの行動理論であれば、オペラント条件づけという原理が大事なんですが、このオペラント条件づけの原理で、目に見える、いわゆる普通の行動も説明できるし、同じ原理で意識や心も研究できると考えるのが、徹底的行動主義の立場です。

この徹底的行動主義の立場は、心は行動だ、意識も行動だって言うんで、全てが行動であつて、共通の一つの原理で説明できると、ある種の独自で特殊ですけども、ひとつの一貫した世界観を提示しているものです。ですから、スキナーの徹底的行動主義は、世界観としての行動主義、心理学の中では、(哲学的行動主義というのは別にあるようですが)哲学としての行動主義と言うことができます。

このスキナーはだいぶ前に亡くなったのですが、今その流れを汲んでいるひとたちは、自分たちの学問を「行動分析学」と呼んでいます。

一方、新行動主義と言う言葉で、スキナーとまとめられるのが、ハルとトールマンですが、ハルとトールマンがやった研究が、その後の方法論的行動主義につながっていきます。ただ、ハルやトールマンは、基本的にはスキナーと一緒に、心理学の分析対象は行動であると考えていたと思いますが、彼らは、行動を予測したり行動を制御したりするためには、行動とは別のものとして人間の内部に起こっているしくみに注目しなければならないと考えたのです。

特に、ハルは、人間の内部にある仕組みをモデル化して、そこから行動を説明するようなことを好んで行ったのですが、そのときに、ハルたちの行動主義が、その後につながるおもしろいやり方を考えついたのです。具体的にはハルたちは、行動とは別の内的過程があって、それが行動に影響しているが、あくまでもそれは行動データをもとに捉えなさいといけなと考えたんです。ハルは、行動ではない内的なものを行動をデータとして分析するという方法を考えたのです。このことは、他の心理学者にとっては大きな意味を持っています。それより以前にもあったとは思いますが、ハルたちは、一つの体系的な方法として、心が行動をデータとして分析できるというアイデアを提唱したことになります。このことが後の心理学に、大きな影響を与えて、方法論としての行動主義、先ほどの言い方によれば方法論的行動主義を生み出した。

つまり、目に見える行動ではない、人間の内側で起きている、まあ心とっていい働きが、行動をデータとして分析できるんだというアイデアが、ハルに連なってくる方法論的行動主義として、1930年代、1940年代から心理学の中に強い力を持つようになったと言えると思います。

3. 方法論的行動主義の意義

このハルたちのアイデアが、方法論的行動主義として用いられるようになったことの意義をもう一度きちんとまとめたいと思います。ワトソンもたぶんそうだったと思うんですが、心理学の研究対象を行動に限ると考えると、この方法論的行動主義は、行動主義ではないんです。なぜかという、この方法論的行動主義をとる心理学の研究対象は、マインドであったり、ソウルであったり、意識であったりするといろいろだと思うんですが心なのです。心は目に見えませんが、直接測定したりすることもできませんから、客観的に測定することが科学の条件であると考えた狭い意味での科学という定義を取ると、目に見えない心とは、科学的な研究が不可能であるか、著しく難しいと考えられます。ところが、

行動はかなりの部分が客観的に観察ができるし、やり方によっては計量することができる。もちろんそれだけが科学ではないが、客観的なものを数量的なデータで取るというのは、何かの学問が科学的であると言うときには非常に役に立つ手段です。行動というのは、客観的に観察して計量することが可能で、それをデータにして、心を研究することができるということは、心を科学的に研究することができることにつながりますし、また、心理学は、昔から自然科学のひとつになることにあこがれてきたわけですから、結果としてそれを可能にすることになったわけです。

とても大事なことは、心理学の歴史で、そのあと発展してくる、認知心理学の存在自体をこの方法論的行動主義が準備をしたと言える点です。認知心理学というのは、認知過程を対象にするわけですから、認知過程というのは、目に見えない心の働きなので、それを行動のデータに基づいて分析できるというアイデアは、行動主義の流れの一つである方法論的行動主義がなければなかったものですから。

4. 方法論的行動主義の問題

行動主義の 2 つの流れについて見てきましたが、荒川さんの企画趣旨の中ではまるで、20 世紀の心理学を行動主義が支配していたかのように書いていたわけですが、私は、最初受け取ったとき、そうだろうかと思ったわけなんです。私のなかで、行動主義といわれて、真っ先に思い浮かべるのは、スキナーの徹底的行動主義ですが、スキナーの徹底的行動主義が 20 世紀の心理学を支配したなんてことは、どんなにひいき目に見てもありえないわけです。皆さんご存知かと思いますが、徹底的行動主義とか、行動分析学というのは、ごく少数の方に支えられている小さなセクトなわけです。ちなみに、私は行動分析学会の十何年来の会員なので、どちらかというとそのセクトのほうなので、批判というわけではないのですが、20 世紀の心理学を支配していたのは、思想としての行動主義とか世界観としての行動主義ではなくて、行動のデータから心を分析・研究できるっていう方法論的行動主義なのだと思います。

心を研究するときに、行動をデータとして取らなければ心理学として認めない世界というのは、心理学の教育を受けたものにとっては、ある意味当たり前のものですが、それがここでいう方法論的行動主義であると言えると思います。

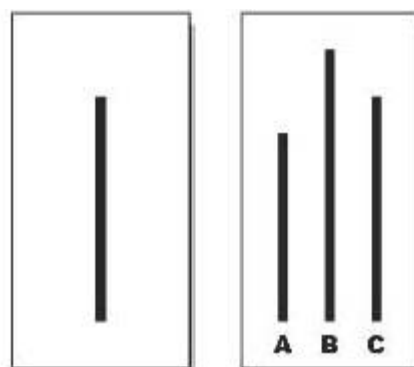
では、この方法論的行動主義を批判的に捉えようとするならば、どういう問題があるのかということを考えたいと思います。方法論的行動主義は、行動のデータによって心を研究することができるという立場です。心理学は心の学で、かつ科学になりたいから、この

方法論的行動主義をとって、60年くらいのあいだ客観的で計量可能な行動データから心の研究を盛んにやってきたわけです。この方法では、実際に研究したい心自体が目に見えないまま残っており、それを行動データによって研究します。ですから、この方法論的行動主義の実際的に一番大きな問題は、観察できている、あるいはデータとして収集できている行動データと、本当に研究したい対象である心とが本当に対応しているのか、という問題です。

心理学ってどういう学問だと思うかと聞いたときに、質問紙調査をする学問だと言われたことがありますけれども、この質問紙も行動データなのです。紙に書かれた目盛りに○をつけることには言語行動が介在していますし、少なくとも質問紙に答えていること自体は行動であって、目に見えないものではないわけです。つまりここで行動主義は、質問紙に○をつけるという行動を、心を知るためのデータとして扱っているわけです。

では、質問紙法で尺度の妥当性というのは、どういうのを言うかということ、その尺度で、本当にそれが測れているのかということです。この妥当性の問題というのは、質問紙法だけに存在する問題ではなく、方法論的行動主義の立場をとる研究すべてにあります。ここでは、見ているのは行動であって、心そのものではないんですが、行動が心と結びついていると思っているから心を研究していると言えるわけです。同様に、認知心理学でも、人間の中で起こっている認知そのものの研究はできません。それを行動から推測しているので、測定している行動がどれだけ妥当かという問題になる。このときに、行動から心から妥当なデータを得るのに必要なのはなにかということ、ここでは **Artistry** という英語を使ってみたのですが、芸術的なセンスとか 熟練とか熟達とか優れたアイデアとかです。心理学の歴史上の優れた研究というのを見てみると、そこでは、目に見えない心の働きを行動から取り出すすばらしいセンスがあります。

私が何度見ても感心するのが、アッシュの線分組み合わせ実験という実験です。ご存じない方もいらっしゃるかも知れないので説明しますが、これは同調行動の研究です。具体的には、右の図の左側の線と同じ長さの線はAからCのどれかと聞くわけです。すると誰が見たってCなんで、これを間違える人はいないのですが、例えば自分以外の方がみんなBっていうようにすると、Bって言う人がでてきます。それを何回もやっているとみえた長さの平均値がとれるわけです。これの優れているのは、同調というその人の中で起きている働きを、何インチ見え方が変わったかという長さの単位で測ることができる点です。つ



まり、同調を長さで測ることができるわけです。私は、Aschがこのアイデアを思いついたのは、すごいなあって思うわけです。

似たようなものに、認知心理学の研究があって、内的に起きている過程についていくつかのモデルをたてたときに、モデルAが正しいならば、刺激Aと刺激Bを与えたときに、刺激Aのほうが反応時間が早いだろう。モデルBが正しいければ、刺激Aと刺激Bを与えたときに、刺激Bのほうが反応時間が早いだろう。という仮説を立てて、反応時間を測って、どちらの仮説が正しいかを検討しようとするものがあります。実際そこでは、反応時間しか計っていないのに、その人の心の中で起こっていることがどっちが正しいかってことがわかる。

それから乳幼児の認知研究で、乳幼児の様々な行動を使って、その認知過程がどうなっているのかを判断する研究がたくさん行われています。そこでも、目に見えない心を捉えるために行動をデータにする。その行動と心をどう結びつけるかというセンスとかアイデアとか、研究者の経験だとかが反映されているとすばらしい研究になるわけです。

ですからデータが妥当であって、心を上手に映し出す行動データが得られているとき、方法論的行動主義による心理学研究は、非常に輝くわけです。これは決して悪いものではありません。ただ、すばらしい研究はたくさん行われているが、いつもそうではないのが大きな問題だと思います。

特に大きな問題になるのが、この **Artistory** を持っていない研究者が研究するときには、使える方法がどんどん限られていきます。その結果として、研究できることが減っていくことになります。誰かが先行研究でしていることを研究するなら、同じ行動データを使えばいいので割と簡単ですが、新しいことを研究するときには、その新しく扱う心を、どうやって行動から捉えるかが常に問題になって、その人がどれだけの **Artistory** を持っているかが問われてしまいます。そうなることでできることがどんどん減って行って、心がどんどん遠くなる、と言うことが起こるわけです。

私がいつも言うことですが、私が心理学科に入って一番気になったのは、卒論の学生が「こういうことやりたいんです」と言ってきたときに、私ら院生は、「そういうのは心理学では研究にならないから」といって、追い返す役をさせられていました。つまり、おもしろいテーマなのに研究にならないってことが、この方法論的行動主義の問題としておきてくる。そこに若い研究者の不満がどんどんたまっていくということがあると思います。

そういう意味で、質的方法の再評価を準備した若い研究者たちの不満というのは、この方法論的行動主義がうまく機能しないことによって、研究できないことが増えた面に原因があるのではないかと私は思っています。

5. 行動主義批判の2つのフェイズ

行動主義に対する批判は大きく分けて二つのフェイズがありうると思います。

1つは、行動主義は心を研究できないんだと批判です。認知心理学者が、行動主義に対して批判するのが、行動主義だと心が研究できないということです。ただ、これは、ここでは深く扱う必要がなくて、同じ宗教の教派間の争いのような問題だと思います。それには関わり合いたくないなあと思います。

もう一つありうる行動主義に対する批判としては、方法論的行動主義に対する批判がありうると思います。これは、私の立場からしても真剣に考えるべき問題だと思います。もう少し具体的にいうと、方法論的行動主義が、心理学全体を支配していることによって、研究のデータにできる行動のデータの性質が非常に限定されてきたという問題があると 생각합니다。端的に言うと、数が数えられて、量的に測定できて、統計的に分析ができるデータだけが、心理学のデータだと言われるようになってしまったことが、この方法論的行動主義が心理学を支配したことの一つ目の大きな問題だと思います。

もう一つは、行動ではないデータを心理学に使ってはいけないのかという問題があると 思います。ただ、この問題は、徹底的行動主義の立場をとれば、全て行動なんですから、あり得ない問題です。データがとれると言うこと自体、全て行動なので。ただ、一般の心理学者の一般の感性で行けば、たとえばナラティブなデータといえは行動ではないよなあとおもうわけで、やっぱり方法論的行動主義を強く持っている心理学者の立場からすれば、ナラティブのデータは行動ではないからデータにならないだろうと言う扱い方をされると 思います。そういう意味で、行動ではないデータが使えないってことで、使えるデータが どんどん狭まる、すると、できる範囲もどんどん狭くなって、心理学者が自然に持ったり サーチクエッションが研究につながっていかないという問題を生んできたのではないかな と思います。そのなかで息苦しく思う人が増えてきたというのが、20 世紀の終わりの 10 年くらいだったと今は思っています。

6. 心理学のとりべき道

今話したようなことをまとめると、方法論的行動主義が、心理学を支配してきた。方法論的行動主義が上手く機能しないと、研究の方法や研究対象をすごく狭めてしまうと言う 問題があるときに、ではわれわれの心理学はどのような方法をとっていけばいいんだろう かということを考えることができると思います。それは大きく3つくらいの道があるのか なと私は思います。

1つ目は、方法論的行動主義の立場はこのまま堅持して行きながらも、その問題点を改

善していく方法です。つまり心理学の研究対象は、心や人間の内部で起きている過程だが、それ自体は直接捉えられないので、行動のデータを経由して検討していくという方法論的行動主義の立場をやっていきながらも、その問題点を改善していくという立場です。行動のデータだが、これまで扱ってきたような、量的で、統計処理ができるデータだけではなく、いろんなデータを行動データとして使えるようにする多様性を認める立場であると言えるでしょう。質的研究と言われているものの中にも、この立場に非常に近いものがあると思います。グラウンデッド・セオリーなどでシステムが非常にしっかりしたものは、方法論的行動主義の立場で、行動のデータのなかに質的なものを持ち込んだのかなという見え方が私にはします。

方法論的行動主義では、客観的なデータってということが非常に重視されるわけですが、データが客観的とはどういうことか、何が客観的なのかということについてももう少し広く見ることができないかとか、あるいは、今まで客観的とされなかったデータについて、客観性を確立するような方法をみんなで考えていきたいと思いますという立場もあります。そういうふうな考え方も質的方法の中にありますよね。質的方法の客観性を高めることを言っておられる先生が多いですから、こういう考え方は、方法論的行動主義のなかからの多様性としての客観性の見直し、という方向性だと思います。

2つめは、心理学が科学的であることをこれからも守るけれども、科学的になるための方法は、方法論的行動主義以外にもあるだろうという立場です。ただ、正直、私はそういうのが思い当たりません。皆さんの中で、思い当たられる方がいれば、議論していけばおもしろいと思います。心が対象だけど、データは行動ではない科学的で客観的な心理学のあり方を追求していくこともできるかなと思います。

3つめは、もっと根本的なものです。方法論的行動主義が、心理学を支配した一番大きな理由は、心理学が科学になろうとしたことだと思います。そうであれば、科学じゃない心理学があってもいいんじゃないかと言うこともできると思います。もちろん、すべてを科学ではないものにするとなると、方法論的行動主義と同じ失敗をするので、心理学の中で、科学であることを大事にする心理学と、そうでない心理学などいろいろあっていいと許容することになると思います。つまり私は、人文学としての心理学の再発見があるべきではないかなと思います。

同様に、心理学の研究が、心理学者であるわれわれの表現の行為である。表現として心理学を行うこともあっていいと思います。そういう懐の広さが心理学の中にあると、いろいろな問題が解決するんじゃないかなと思うときがあります。

以上のように、だいたい取ることのできる道は3つぐらいあると思うので、今日はこの

後で、おのおのの先生が目指すものの中で、どの辺とむすびついてくるのかを気をつけながら、聞いてみたいと思います。

どうもありがとうございました。

